

2 (現地圃場試験) トルコギキョウの栽培実態現地調査

試験の目的

本市では古くからトルコギキョウが生産されており、安定した栽培技術による高い品質が評価されてきましたが、近年では圃場条件の差、新たな病害虫の発生、複数品目を栽培するために生じる作業繁忙期の重複や労働力不足によって、産地内での品質のばらつきが指摘されています。そこで、市内で栽培されている3品種について、各圃場における栽培管理方法、土壌条件、栽培環境等について、現状を把握することにより、今後の品質平準化に向けた取り組みの資料とすることを目的としました。

関係先

旭川青果物生産出荷協議会花卉部会

調査概要

(1) 概要

市内の6か所の対象圃場(東旭川、永山、西神楽)を時期毎に訪問し、聞き取りや実測等によりトルコギキョウの栽培状況や生育を調査しました。栽培方法、栽培時期等は圃場ごとに異なります。

- | | | |
|----------|--------------|-------------|
| (2) 調査品種 | プライムホワイト | (白, 住化農業資材) |
| | セレブリッチホワイト | (白, 住化農業資材) |
| | ボンボヤージュシルク2型 | (白, サカタのタネ) |

(3) 栽培時期(圃場ごとに異なります)

定植時期: 3月下旬~6月上旬

収穫時期: 8月中旬~9月中旬

調査結果

(1) 市内で多く発生した病害虫

例年よりやや早い5月下旬からハモグリバエが発生し、防除適期を過ぎた圃場はハウス全体にまで被害が広がりました。

病害では、定植初期から中期にかけて立枯病が著しく多く発生しました。土壌消毒を行った圃場においても発生しており、春先の高温乾燥条件により感染力が強まったと考えられます。また、発生程度には品種、圃場間で差がありました。

(2) 土壌分析結果

pHについては、トルコギキョウの好適pHは6.5前後であり、pH5.5以下またはpH7.0以上の圃場では活着不良や生育不良等が懸念され、矯正が必要と思われます。ほとんどの現地圃場において交換性加里、トルオーグリン酸が基準値を超過していました。

また、一部圃場では、肥料の蓄積や、基肥が明らかに多い事例も見られました。

表 各圃場の土壌分析結果と施肥ガイドにおける適正值

| 圃場 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 診断基準 (施肥前) |
|-----------------------|------------|------|-------------|------------|-----------|-----------|----------------|
| 土壌分類 | グライ 低地土 | 黒ボク土 | 黒ボク土 | グライ 低地土 | 灰色 低地土 | 灰色 低地土 | |
| pH (H ₂ O) | 6.1 | 6.9 | (6.3) | 5.3 | 7.3 | 6.0 | 6.0~6.5 |
| EC (mS/cm) | 0.1 | 0.1 | (2.6) | 0.2 | 0.1 | 0.1 | ~0.3 |
| 硝酸態窒素 (mg/100g) | 1.4 | 1.5 | (109.6) | 7.1 | 0.2 | 0.1 | — |
| 熱水抽出性窒素 (mg/100g) | 6.3 | 10.9 | (0.5) | 11.9 | 6.7 | 7.0 | 5~10 (標準対応) |
| トルオーグリン酸 (mg/100g) | 82 | 215 | (151) | 28 | 51 | 44 | 10~30 |
| 交換性加里 (mg/100g) | 68 | 70 | (136) | 54 | 77 | 73 | 15~30 |
| 交換性石灰 (mg/100g) | 321 | 610 | (550) | 162 | 457 | 323 | 100~490 |
| 交換性苦土 (mg/100g) | 53 | 105 | (173) | 27 | 103 | 52 | 25~40 |
| ホウ素 (ppm) | 0.9 | 0.7 | (3.0) | 0.5 | 0.8 | 0.6 | 0.5~1.0 |
| 備考 | | | 施肥後の 分析値 | 新畑 | | | |

※網掛け部は施肥ガイドにおける診断基準から超過または不足した値。

(3) 栽培管理

定植後の温度管理、灌水管理はトルコギキョウの生育段階に合わせて、ほとんどの圃場で適切に行われていました。一方、育苗中に他品目と作業が重なり、定植が遅れて老化苗になってしまった、定植初期に遮光ネットを使用できなかった圃場も見られました。

(4) 切花品質

栽培管理によってほとんどの圃場で一定の切花品質が確保されていました。しかし、低 pH 土壌や基肥の過剰等により、丈が短くなる等、切花品質が低下してしまっている事例もありました。

頂花摘蕾、花蕾整理を行った圃場では花蕾の開花時期が揃っており、出荷時に最初に咲いた花が萎れる等の品質低下はほとんど見られませんでした。

まとめ

各圃場では、温度管理や灌水等の基本的な管理は適切に行われていましたが、他の栽培品目との作業競合等が生育や品質に影響した事例もありました。労働力確保や経費の面から直ちに品質平準化に向けて取り組むことが難しい一面もありますが、施肥については具体的に基準値が設定されており、基肥と追肥の配分変更や肥料銘柄の見直し等は比較的实践しやすいものと思われます。本調査結果については、今後、関係機関と連携しながら、産地の品質平準化に向けて取り組むための基礎資料として活用させていただきます。

最後に、本調査において御協力をいただいた生産者の皆様に厚くお礼を申し上げます。